

レヴィンの贈り物

川 浦 康 至

恩師の贈り物

学問であればなんでもそうだと思うが、心理学も勉強を重ねるにつれ、日常生活で役立つ知識も増えていく。そうした知識の一つにツァイガルニク効果がある。

ツァイガルニクは発見者の名前で、ツァイガルニク効果とは、途中で終わったままの課題は忘れにくい現象をいう。私がこれを知ったきっかけは、五十年前に学部で受けた磯貝芳郎先生の授業だった。そのとき、先生が例としてあげ、いまだに実践しているのはカバンにしまわないことだ。

たとえば駅に向かう途中でハガキを投函するでしょう。そんなときは、ハガキを手にしたまま出かける。いったんカバンにしまふと、その時点で中途半端な状態、つまり緊張状態が解消してしまう。その結果、ポストの前を素通りし、気付いたときはもう駅の構内。しかし手の中にあり、緊張状態が続いているかぎり、投

函し忘れることはない。付け加えるならば、途中でどこにも立ち寄らないことが大事だ。駅前の書店で立ち読みしたりすると、うっかり本の上にハガキを置きかねない。置いたら最後、課題は完了し、一件落着。投函どころか置き忘れる羽目になる。

さらにさかのぼること十二年。小学二年生のときのことである。ある日、教師と思しき人が二人、授業参観に見えた。「信濃教育会から来ました」。信濃教育会は長野県内の教職員から構成される自発的職能団体で、一八八六年に設立された。

先生の一人が黒板の前に立ち、熊田です、と自己紹介し、こう続けた。

「みなさん、くれぐれもわたしの名前を大きな声では呼ばないでください。みんなビククリして逃げていきますから」。教室は笑いの渦。おかげで六十年あまり経った今もこうして覚えている。学部の三年生ごろだろうか。他大学から移って来られたばかりの磯貝先生が社会心理学の初回の授業で、自己紹介をされた。大学卒業後、長野県の信濃教育会で研究員をしていたと言う。こん

な場面で信濃教育会という言葉を耳にするとは思ひもしなかった。びっくりして、「私は実は長野生まれで、小学生のころ……」と熊田昇先生の一件を話した。すると、「えっ、そのとき隣にいたのはぼくですよ」と、予想外の言葉が返ってきた。あいにく記憶には残っていないかったものの、事実上、十二年ぶりの再会だった。この奇縁がきっかけだったのだろう。その後も共同研究や本の分担執筆と、磯貝先生の仕事を手伝う機会が多かった。

社会心理学者レヴィン

習った当時は当たり前のことと思ひ、その重要性に気づけなかった知識もある。それがレヴィンの公式である。しかし、いまや、この公式は私にとって心理学からの最も大きな贈り物となっている。みなさんにとつても大事な贈り物である。

公式の説明をしよう。

レヴィンの公式とは、社会心理学者のクルト・レヴィン (Lewin, Kurt) が提唱した公式、 $B = F(P, E)$ をさす。

B は Behavior (行動)、F は Function (関数)、P は Person (人)、E は Environment (環境)。P と E のあいだにある「」は算術演算子である。乗算かもしれないし、加算かもしれない。あるいは別の関係かもしれない。いずれにしても、人の行動はその人と環境の両方で決まることを表す。

同じ人でも状況や環境によって行動は異なるし、同じ環境でも人によって行動は異なる。これを疑う人はまずいないだろう。そ

んな当たり前のことを数式で表しただけ。当時はその程度にしか思っていないかった。ところが、十数年前、自己責任論が社会的争点として浮上したとき、まさきき頭に浮かんだのがこの公式だった。

学生たちと話していても、自己責任論を肯定する声は大きく、自分自身の境遇やかかえている問題を「自己責任」と「諦観」する姿を目にしてきた。そのたびに歯がゆい思いをし、「確かにあなた自身に起因する部分もあるかもしれないけど、半分は社会の側の問題。だから、そんなに自分を追及しないように」と言い続けてきた。半分かどうかはともかく、自分の側に原因を求めすぎないように強調した。そのとき念頭にあったのがレヴィンの公式である。いつのまにか、汎レヴィン主義者になっていたようだ。

ここで、彼の生涯を紹介しておきたい。

レヴィンは一八九〇年、プロイセン (現在のポーランド) のユダヤ人家庭に生まれた。一九〇五年、家族はベルリンに引っ越し、彼はそこで教育を受けた。一九〇九年、フライブルグ大学に入学、その後ミュンヘン大学に編入した。同大学で彼は社会主義運動に参加し、反ユダヤ主義との闘いや女性の権利向上運動にかかわった。二〇歳のとき、ベルリン大学に入学、哲学と心理学を学んだ。一九一四年、ドイツ軍中尉として従軍したが、負傷し、大学に戻り、一九一六年「意志過程の抑制における心的作用と連合の根本法則」で学位を取得した。翌年発表した「戦場の景観」は自身の兵役経験にもとづいた研究で、レヴィンにとつて最初の学会誌掲載論文である (大塚弘・小川隆 訳編 (1942) 『ドイツ戦争心



図1 クルト・レヴィン
(https://en.wikipedia.org/wiki/Kurt_Lewin から)

理学』に収録されている)。兵士と非兵士とは同じ物理環境にあっても、それを異なる生活空間として体制化しているというも
のだった。

一九二一年、ベルリン大学の私講師となり(当時、ユダヤ人は教授になれなかった)、哲学と心理学を教えた。学生同士で討論する時間が多く、そのようすを弟子のアダムスは次のように語った。

「人数は四〜五人から一〇人。討論は出たり入ったり、思いつきの質問からはじまり、変化し、別のことを持ち出す。重要な最初

の問題とはかけ離れたものが出てくる。レヴィンは支配的でも圧倒的でもなく、大胆な思いつきに対しても耳を貸そうとする」。

一九三二年、その評判からスタンフォード大学に招かれ、客員教授として六ヶ月間を米国で過ごした。状況によって人間行動が決定されるという主張は、当時、主流だった行動主義や精神分析からすると革命的な内容で人気を集めた。

翌年、いったん帰国するも、ヒトラーが首相に就いたことから将来を危惧、八月、米国に移住した。亡命後は、名前の発音をドイツ風のレーヴィン (Lehvein) から、ルーウィン (Lewin) との説もある) に改めた。しばしば綴りを間違えられ、電話がかかってこなかったりするケースが多かったためだという。一説によれば、子供がドイツ風の読み方をいやがったともされる(日本ではレヴィンという表記が定着している)。

その後、コーネル大学を経て、一九三五年、アイオワ大学に移り、児童研究と集団研究に取り組んだ。レヴィンの問題意識の根底にはヒトラーの存在があった。民主的社会とはどういう人間共同体であるべきかを問い、その中で、民主的リーダーシップや人間の成長のあり方を探った。彼は語る。

「独裁的状況と民主的状況における行動の差異は個人個人に差異があるために生じたのではない。独裁的リーダーに当たるとほんの半時で、無感情のやる気のないただの人間の集まりになる。独裁制から民主制への変化は、より時間がかかる。独裁制は個人の上におしつけられる。が、民主制は学ばねばならない」。

翌一九三六年、人間行動に関する公式、 $B = f(P, E)$ を発表し



図2 ブルーマ・ツァイガルニク
(https://en.wikipedia.org/wiki/Bluma_Zeigarnik から)

問題委員会にかかわり、宗教的、人種的偏見を解消するための施策づくりに貢献した。一九四七年二月十二日、五六歳で急逝、心臓発作だった。

数多くの研究者を輩出し、多方面の業績を残したことから、レヴィンは社会心理学の創設者と呼ばれる(前記の引用は、Malone, J. C. (2001) *Gestalt Psychology and Kurt Lewin*、プロ1(望月衛・宇津木保訳(1972)『Kurt Lewin: その生涯と業績』、シュレンバーグ(早川浩一・井上隆二訳(1981)『社会心理学の巨匠たち』、<http://deplytrivial.com>, Wikipedia、ウィキペディア)から。相互に記述の不一致が見された)。

生活空間(人と環境を含む事象全体)の体制化が目標に対する緊張体系として成立している場合、目標が達成されると緊張が解かれ、体制化も解かれる。このツァイガルニク効果を実証したブルーマ・ツァイガルニク(1901-1988)はレヴィンの指導学生だった(図2)。

オルテガとレヴィン

同時代を生きたスペインの哲学者、オルテガ。彼の主著に『大衆の反逆』がある。気になりつつ、長らく放ったままの本だった。それを教育テレビが「100分 de 名著」で取り上げた(放送は二〇一九年二月)。

講師役の中島岳志によるテキストを繰っていると、こんな見出しが目に飛び込んできた。「私は、私と私の環境である」。レヴィ

た(*Principles of Topological Psychology*、外林大作・松村康平訳(1942)『トポロギー心理学の原理』収録)。公式は、その後、 $B=F(P,E)$ と記されるようになった。

レヴィンは一九四三年(四四年ともされる)に母を亡くす。彼が八方手を尽くしたものの、救出は失敗に終わり、ポーランドにあったナチス強制収容所で命を絶った。この悲劇は、のちの研究生活にも影響を及ぼす。

一九四四年、レヴィンはマサチューセッツ工科大学に招かれ、集団力学研究所の所長に就任した。翌年にはコネチカット州人種

ンのあの公式を彷彿とさせるではないか。さつそく、その一文が載る『ドン・キホーテをめぐる思索』(1914)を確認した。

私は、私と私の環境である。そしてもしこの環境を救わないなら、私をも救えない。Benefac loco illi quo natus es (生まれし場所に祝福あれ)と聖書も言っている。プラトン学派でも、すべての文化のモットーとして次の言葉をうたっている。「外観を救え」。すなわち現象を救えという意味である。われわれの周囲にあるものの意味をさぐれということだ(「読者に」、佐々木孝訳)。

冒頭の一文は英語では、'I am I, and my circumstance.'とある。中島は、この箇所を以下のように説く(『100分de名著オルテガ大衆の反逆』から)。

私という人格や人間性は、私の選択外の部分、私が選びようのないある種の「環境」によって規定されている。「私」とはそのように存在するものであって、「私」をめぐる状況、環境と直接的につながっているというのが、オルテガの考えでした。(略)さまざまなものとの出会いによって「私」を取り囲む環境ができいき、その環境との関わりによって「私」が構成されていく。ここには、自分の能力を過信することへの強い懐疑があります。

「環境」について、オルテガは別の論文で、こう言及する。「時代とはわれわれを囲み取り巻くもの、すなわち環境 (circumstan-

ce)である」(「環境についての異文」、佐々木孝による訳)。

Environment と Circumstance と用語に違いはあるものの、レヴィンになぞらえて解釈すれば、「私」とは独立で存在するものではなく、環境や状況(時代や社会)とのかわりて生じる現象である。「私」は、ある環境の中で行動する私でもある。そうでなければ現象になりようがない。まさにB=I (B=C)と瓜二つ。付け加えると、中島のいう「自分の能力を過信することへの強い懐疑」とは、裏返せば自己責任論の否定にも通じる。

オルテガはレヴィンより七年早い一八八三年に生まれ、レヴィン逝去八年後の一九五五年に七二歳で亡くなった。オルテガの生涯は、レヴィンの生きた時代をまるごとカバーする。二人がともに経験した最も大きな出来事は二度にわたる世界大戦である。

二人の間に交流はない。しかし、前述のように二人の思想には共通点が見られる。時代精神のなせる技と言えよう。かれらは、全体主義に翻弄された時代の中で、その大きな波に半ばすすんで流される人間、環境に対する人間の無力さを目の当たりにしたのではないだろうか。

レヴィンの公式とその可能性

レヴィンはB=I (P, E) について、一九四六年、『児童心理学便覧』に寄せた論文「全体状況の関数としての行動と発達」で、次のように説明する (Cartwright, D. (Ed.) (1951) *Field Theory*

in Social Science、以下は抜粋)。

部屋の中のおもちゃなどの物に対する一歳児の反応は、母親がいるときといないときとで大きく異なる。抽象的に表現すると、行動(B)は人(P)と、その人の環境(E)の関数、すなわち $B = f(P, E)$ である。この表現は感情的爆発のみならず、「意図的」活動、夢や願望、思考、同じく会話や言動にも当てはまる。

行動に関するこの公式で、その人(P)の状態と、その人の環境(E)の状態とは相互に関係する。このことは同じ子供が空腹のとき、あるいは満腹のとき、また元気いっぱいか疲れ切っているときにも当てはまる。つまり、 $E = f(B)$ となる。その逆も真である。つまり、その人の状態はその人の環境に規定され、 $P = f(E)$ となる。励まされた後の人の状態は、落ち込んでいる人の状態と異なる。民主的雰囲気の集団にいる人の状態と独裁的雰囲気にいる人の状態も異なる。

要約すると、行動と発達は、その人の状態とその人の環境とに規定されると言えよう。つまり $P = f(B, E)$ である。この公式で、その人(P)とその人の環境(E)は相互に規定し合う変数とみなすべきである。つまり行動を理解ないし予測するためには、その人とその人の環境を相互に依存し合う要因のひとつとして考慮しなければならない。これらの要因全体を、その個人の生活空間(LSp, 引用者注: Life Space)と呼び、 $B = f(P, E) = f(LSp)$ と表現することにする。それゆえ生活空間は、その人と、その人の心理的環境の両方を含む。

心理学は、その人とその人の環境を含む生活空間を、一つの場として扱わなければならない。

レヴィンは、EはPに依存し、PはEに依存すると主張した。つまり環境と人はそれぞれ単独で存在するのではなく、環境は人によって異なり、そこには認知環境も含まれる。他方、人は環境による影響を受ける。

レヴィンはどこまで考えていたのかわからないが、彼の公式は拡張が可能である。従属変数のB(行動)には、彼自身が言及した意図的活動や夢、願望、思考、会話、言動に加え、達成や努力、さらには人生まで含められる。独立変数のP(人)には、性格や能力、態度、動機といった内的要因が、E(環境)には、個々の場面から社会状況、制度まで、さまざまな外的要因が含まれる。非正規雇用や失業、貧困といった社会格差が語られる際、しばしば本人の問題に帰せられる。まじめに働く気がないからだ、やる気がないからだ、といった「自己責任」の押し付けである。対策もそれを前提に講じられる。職業訓練機会の提供や資格取得の支援は、その一例である。挙げ句の果てには、自衛隊に入れて鍛え直せと言いつつ自民党政治家まで出てくる始末である。だが、これによって社会格差は解消されるのだろうか。

この図式をレヴィンの公式にあてはめてみよう。非正規労働や失業・貧困状態がBに入り、Pには、たとえばやる気のなさが入る。だがEは空白のまま、問われない。つまり労働者派遣法の拡大や条件緩和による正規雇用枠の減少、それによる労働条件の

低下といった環境条件は考慮されない。たとえ、やる気があっても、資格を取得しても、労働条件が劣悪であれば働き続けられない。労働にかかわる制度が整備されないことには安定した労働や一定の収入も見込めない。もちろん個々人の資質や性格は無視できない。しかし、人はもともと多様である。人を変えるのは容易でもなければ、そもそも望ましいことでもない。私たちが変えられるのは人ではなく、社会や制度、つまりEである。不安定な就労と生活は、さらに自己評価に悪影響をもたらす環境ともなる。自分は非正規でしか雇ってもらえない存在なのか、正規雇用に値しない人間なのか、という気持ちは個人の尊厳を損なわせるからだ。

行動に占める環境要因の力が大きくなるほど、結果として要因の力は小さくなる。極端な場合は無と化す。極端な例かもしれないが、戦場で、住民を銃殺するように命じられた兵士を想像すればすぐに納得できるだろう。たとえ殺したくないと思っても、人道主義価値観を持っていても、兵士は上官の命令に逆らえない。戦前の日本にあった軍人勅諭には「下級の者が上官の命令を承ること、実は直ちに朕（引用者注…天皇）が命令を承ることと心得よ」とある。つまり上官に逆らうことは天皇に逆らうことと同義とされ、逆らうことは本人の死を意味した。たとえ逆らっても、別の兵士が遂行するだけという状況でもある。

状況の絶大な力を実験室で再現した研究がある。社会心理学者のミルグラムが一九六三年に行なった服従実験である。権威者から良心に反する命令を受けたとき、人はその命令に抵抗するのか、

それとも服従するのか。実験の結果、戦場からほど遠い場面であるにもかかわらず、権威者（ここでは大学の研究者）の命令に従順な人間の姿が明らかになった（山形浩生 訳『服従の心理』）。人は権威システムに組み込まれると、自身を他者からの要求を遂行する代行人とみなし（代行状態）、その他者に責任を転嫁すること、自身の行動に責任を感じなくなる。軍人勅諭の一節も、心理学的には、強制する一方で代行状態を促すはたらきをしている。

環境の力を実証した心理学研究は数多くある。すぐに思い浮かぶだけでも、傍観者効果、同調、社会的促進、集団思考、社会的比較、単純接触効果、プライミング効果と枚挙にいとまがない。当然といえば当然だ。人間行動は環境の産物だからである。ただし、われわれは環境の力を必ずしも自覚していない。

過小評価される環境要因

人間行動は環境の産物であるにもかかわらず、とりわけ他者の行動について、環境や状況の力（E）を過小評価し、人の要因（P）を過大評価しがちである。この特徴は広く観察されるため、「帰属の基本的エラー」（Fundamental attribution error）と呼ばれる。たとえ、その行動が強制されてなされたことを知っていても、その行動の原因は行為者の内的要因に帰属されやすい。強制された事実、つまり環境要因の存在は無視され、あたかも自ら進んで行ったかのように受け取られる。このエラーを発見したのは

ジョーンズとハリスの二人で、彼らは次のような実験を行った (Jones, E. E. & Harris, V., 1967)。

被験者は、キューバの社会主義政権に関する学生の解答文を読み、その書き手の政治態度を推測するように求められた。作文の内容には政権支持と政権反対の二種類があり、解答状況として自由条件と指定条件の二種類が設定された。自由条件の被験者には、学生が自由にどちらかの立場を選んで書いたものであるとの説明がなされ、一方、指定条件の被験者には教師の指示を受けて書かれたものであるとの説明がなされた。

実験の結果は以下のようであった。

自由条件では、作文の内容にかかわらず、そこには書き手である学生の真の政治態度が反映されているとみなされた。これは当然の結果である。ところが、若干程度は弱まるものの、指定条件でも同じような結果が得られた。教師に指示されて書いた作文なのだから、論理的には、その内容は書き手の政治態度を反映しているとは言い難い。しかし、結果はそうならなかった。教員に指示されたという環境要因は過小評価され、書き手の内的要因(態度)が過大評価された。

外的要因の軽視は意識されないまま、つまり自動的にはたらくため、内的要因の過重視を排除することはむずかしい。人は、行動の主体は本人であり、その行動にはそれなりの動機があるはずだと思いがちである。したがって、こうした認知機制を抑制するのはむずかしい。大事なことは、自分も含め、人は「帰属の基底的エラー」をしがちだと知ることである。

帰属の基本的エラーを、社会心理学者の山岸俊男は「心でっかち」と呼んだ。『心でっかちな日本人』と、この言葉を書名に含めた彼は「心の持ち方さえ変えればすべての問題が解決される」と考える『精神主義』が、その極端な例です。心でっかちは、その結果、たとえば竹やりでアメリカ軍にたちむかうなどといった、とんでもない行動を生みだしてしまいます」と説明する。さらに、「心でっかちな人の典型は(略)現代社会の問題をすべて『心の荒廃』で説明できる、と考えている人たちです」と、こうした発想では問題解決につながらないと強調した。

この主張は「心で社会を解釈してはいけない」「問題の本当の姿を見えなくする」「お説教よりも制度構築を」に連なる(長谷川眞理子との対談集『きずな』)と思いやりが日本をダメにする)。同じく社会心理学者の唐沢かおりは、自著『なぜ心を読みすぎなのか』で、「私たちは行動の原因を推論する際、状況要因よりも、性格や態度などの行為者に関わる要因が原因であると考えがちなのである」と書き、帰属の基本的エラーをはじめとするメカニズムを解き明かす。

いずれも発想の原点はB=I+D(P)にある。現実の人間行動はEなしでは生じない。それにもかかわらず、他者に対してはEを考慮しようとしなない。なぜなのか。そう思うことで心の平安が保たれるからである。自己の行動の原因については環境要因を重視するのに対し、他者の行動については内的要因を重視する。こうした現象は「行為者—観察者バイアス」と呼ばれる。

「行為者—観察者バイアス」の応用に、ラーナー(Lerner, M. J.,

1970)が提唱した「公正世界仮説」という考え方がある。これは、「良いことは良い人に起こり、悪いことは悪い人に起こる。頑張った人は報われ、頑張らなかつた人は痛い目にあう。悪いことをしたら必ず罰せられる。世界にはそうした秩序があるのだと考えること」をさす(村山綾「人はなぜ被害者を責めるのか?」https://psychmuseum.jp/show_room/just_world/)。

このような心性は被害者非難につながる。たとえば深夜、路上で暴漢に襲われるという事件が起きたとき、そんな遅い時間に歩くほうが悪い、そもそも危険な場所を歩いていたのではないかと被害者に非難が向けられる。責められる対象は暴漢であるにもかかわらず、被害者に向ける行為は、環境要因を無視して人要因に帰属させることもある。責める側はそれによって、自分は大丈夫、自分だつたらこんな被害に会うことはない、と安穩としていられる。もし事件を環境要因に帰属させると、自分も危険な目に会う可能性を認めることになり、心配も高まる。そこで現れるのが自己責任という考え方である。被害者は残業で遅くなつたのかもしれないし、久しぶりに会つた友人と遅くまで飲んでいたのかもしれない。そうした事情は誰にでもありうる。それを無視して、被害者が責め立てられる謂れはまったくない。

私たちは、常に環境の影響を受けながら行動している。だが、人はその事実気づかないまま、とりわけ他者の行動について「心でつかちな」判断をくだす。そこには、自分は主体的にふるまっていると思いたい気持ちもはたらいていよう。実際はそうではないのにもかかわらず、である。

レヴィンは、「よい理論ほど実用的なものはない」(There is nothing as practical as a good theory)と語った。彼のシンプレな公式は応用が効き、この先もすぐれて実用的である。

〔川浦康至(2020)レヴィンの贈り物 コミュニケーション科学、51、一六二―一七〇〕